

## 馬瀬西の坊

昔、馬瀬の堂の坂の上に極楽山・安養寺という寺があり、「西の坊」というお坊さんが住んでいました。

西の坊はもとが武士だったという人もあり、仇もちだという人もありましたが、本当のことは誰も知りませんでした。

ただ、毎朝、山あいの清水寺から聞こえてくる明け六つの鐘で朝の念仏がはじ

まり、暮れ六つの鐘が鳴るまで村々をまわり、田ん圃の道をなおしたり、落ちそうな橋をかけなおしたりして、お百姓さんたちから兄とも親ともしたわれていました。

ある風の強い晩のことでありました。はるか向こうの東の山、清水山の山々が真つ赤になって燃え上がっていました。

西の坊が衣をたすきがけて二里の山道をかけ登ったときには、鐘楼も大講堂も焼けに焼けて、近づくこともできません。

何百人もお坊さんたちは、ただ、ぼうぜんと立ちつくしていました。

文明12年12月26日（西暦1482年）水つくような寒い晩のことでありました。

それから西の坊の、誰もが目をみはるような物すごい勸進がはじまりました。

馬瀬村はいうに及ばず、清水寺の鐘の音が聞こえると思われる十里四方の村という村へ、水つく山道や霜柱の立つ田ん圃道を、「南無阿弥陀仏・・・観音さまのお力により十万世界の人々を、お救い下さい

ますように。そのためにご芳捨下さいませ。」

わらじは足の指のあかぎれで真つ赤な血でそまり、錫杖を持つ手はしもやけで切れ切れにふくらんでいます。西の坊が唱える念仏は寒空の中にひびき渡っていました。

そして、行く処、彼を心から尊敬する貧乏な百姓たちは、今、売ったばかりの大根代の中から、惜し気もなく西の坊の首にかかる頭陀袋の中へ浄財を入れました。

このようにして、大火があつてから僅か四ヵ月後の文明十三年五月四日、西の坊が頼んだ大工、又エ野道佑により鐘楼は完成し、すぐ下の鑄場から、新しく鑄直した鐘をかつき上げて吊し、五ヵ月ぶりに清水寺の鐘が十里四方へ鳴りわたりました。

このことは清水寺の記録にも残っていますが、世にも不思議な話として、それから三百年以上後の江戸時代・老中松平定信が隠居した後、集古十種という本にも書かれています。

さらにこの不思議さは、それまで三十年毎くらいに清水寺は火事に見舞われていましたのに、それから約四〇〇年間、つまり大正二年まで一度も火事は起こりませんでした。

馬瀬西の坊の願は、こんなにもその頃の人達の心を洗い清めていたというお話でございます。